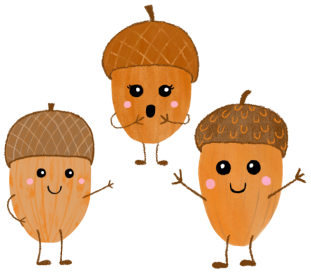

図書館だより

太田東高校図書館

2022.12月

先生たちの本紹介

丸山 義之　先生

今回「図書館だより」の執筆の依頼を受けましたが、恥ずかしながら今までほとんど読書をしてきませんでした。ですので、皆さんにお勧めできるような本はないかもしれませんが、今まで読んできた中で良いと思った本・作家を紹介したいと思います。

好きなジャンルにはミステリー系があります。ミステリーといえば東野圭吾でしょうか？　東野圭吾の作品も良く読みます。本当にどの作品も面白いですよね。私の世代でガリレオシリーズを知らない人はいないくらいメジャーな作品ですが、今の高校生はどうでしょうか？　ご存じでしょうか？　現在ガリレオシリーズの「沈黙のパレード」が映画化されているので、これを機会に読んでみても良いかもしれませんね。ですが、今回紹介するのは東野さんではなく「知念実希人」さんです。知念さんの作品は医療ミステリーが中心です。どの作品も本当に面白いですよ。その中で今回皆さんに勧める作品は「崩れる脳を抱きしめて」です。この作品は、医療＋恋愛ミステリーです。詳細は説明しきれないので省略しますが、とても面白いです。読書に慣れていない私ですら、一気に読めてしまう作品です。ミステリーでありながら感動もします。泣けます。本当にお勧めです。この本をきっかけに知念さんの作品にはまり、結構な冊数を読みました。また、今回知念さんの作品である「祈りのカルテ」を原作としたドラマが玉森裕太主演で始まっていますので、ぜひ！！

そして、ミステリー以外で良く読むジャンルとして感動系がありますが、その中でお勧めな作家が「宇山圭佑」さんです。一番有名な作品は「桜のような僕の恋人」でしょうか？　ですが、今回は初めて読んだ「恋に焦がれたブルー」をお勧めしたいと思います。簡単に言うと、男女の恋愛の話ですが、そう簡単にはまとめきれない。とにかく切ない、辛い、でも感動。きっと泣けます！！　内容はぜひ実際に読んで確認してみてください。

神藤 啓太朗　先生

愛読書の紹介とエピソードを寄せてくれとの依頼を受けた。他の誰かと被るのはつまらないので、たぶん紹介しても読む気になる人はいなそうな変わり種を、二つの顔で書いてみることにする。

私は哲学教師だ。哲学科というところで6年ほど過ごして、残念ながら物にならないことが判明したため、象牙の塔から追放（釈放）された。とはいえ青春の多くの時間を費やしたのは事実なので、愛憎相半ばする書物もそれなりにある。そこで1冊目は『存在と時間』だ。ハイデガーというドイツ人が書いた未完の書。彼の人間性は決して褒められたものではなく、むしろ唾棄すべきものだが、この本に関しては最高にパンクでクールだ。そう感じる者がどれくらいいるかはわからないが、少なくとも私は首ったけだった。惚れた弱みで振り回されたあげく、無惨な別れを経験したが、私の青春そのものだった。ちなみに、カントの『純粋理性批判』やヘーゲルの『精神現象学』なんかを読んだという人間は「ほぼ」眉唾なので注意しよう。あの類いの本に付き合えるのは頭が良い悪いではなく、頭が「強い」奴らだけだ。

私は登山部顧問だ。公私問わず週末は山にばかり行っている。10月は泊まり2回、日帰り2回の予定だ。続いての2冊目は横山勝丘の『アルパインクライミング考』にしたい。どんな世界にも「一線を越える」という表現があるが、登山の世界における一線を越えた側の視点で書かれている。「ある一線を越えた登山を続けているといつかは死ぬ」とはよく聞く表現だ。著名な登山家は生きている者のほうが少ないくらいで、彼らの多くは山で非業の死を遂げている。そんな「山屋」と呼ばれる人間の思考とは、また自分の命を賭け金にして極限に挑む心持ちとは何かに触れることができるのが本書だ。私自身はクライマーではなくハイカーだが、羨望と劣等感と山への渇望をいつも沸き立たせられている。

読む気は出ただろうか。もしそうなら、しくじった。

齋藤 孝弘　先生

《 生徒に勧めたい本についてインタビューをしてきました。》

１冊目は灰谷健次郎の「兎の眼」という本だ。大学を出たばかりの新任教師・小谷芙美先生が受け持ったのは、学校では一言も口をきこうとしない一年生・鉄三。決して心を開かない鉄三に打ちのめされる小谷先生だったが、鉄三の祖父・バクじいさんや同僚の「教員ヤクザ」足立先生のおかげで、小谷先生は次第に鉄三の中に隠された可能性に気づいていくのだった…。家族と家庭の荒廃が叫ばれる現在、真の教育の意味を改めて問いかける。すべての人の魂に、生涯消えない圧倒的な感動を刻みつける、灰谷健次郎の代表作となっている。そして教員を目指すきっかけとなった本だそうだ。

２冊めは村上春樹の「バースデイ・ガール」という本で、物語は回想から始まる。二十歳の誕生日を迎えた女の子は、誕生日もまたアルバイト先のイタリア料理店で働いていた。その日、店のフロア・マネージャーが体調を急に壊し、代わりに彼女がフロア・マネージャー以外誰も姿を見た事のないオーナーに夕食を運ぶ事になる。時間通りに食事を運んだ彼女はオーナーに年齢を尋ねられ、今日が二十歳の誕生日であると言う。オーナーに誕生日を祝福するしるしとして一つだけ願いを叶えようと言われ、彼女は戸惑いながらも一つの願い事をする。回想する彼女に「僕」は願い事が叶ったのか、願い事に後悔はないか、と尋ねる。この本が、国語の教員を志すきっかけとなったそうだ。

３冊目は、大村はまの「教えるということ」という本で50年に及び一教師として教育実践の場に立ち、退職後も新しいテーマで研究・発表しつづけている著者が、本当に“教える”ということはどういうことなのか、具体的な数々のエピソードを通して語った表題作「教えるということ」をはじめ、「教師の仕事」、「教室に魅力を」、「若いときにしておいてよかったと思うこと」を収録。プロの教師としてあるべき姿、教育に取り組む姿勢について、きびしくかつ温かく語る。教育にかかわる人をはじめ、教育に関心をもつすべての人々、とくにこれからの社会を担う若い人々に贈る一冊で、良い教員になりたいと思うようになった本だそうだ。

いずれの本も、読んだその時ではなく、ある程度の時間を経てから、自分の中でじわじわと動き出してきたそうだ。そして、今でもなお、自分を呼び込んでいる感じがあり、これらの書籍そのものではなく、こういった読書体験を得るためにも、学生時代の鮮やかな読書活動を勧めたいと思う、とのことだった。たしかに、読書は想像力や思考力、様々な知識が身につき将来の選択肢が広まるきっかけになったりするので大切だと改めて感じることができた。

図書委員「これから読んでみたい本」

赤と青とエスキース

青山美智子

むらさきのスカートの女

今村夏子

夜は短し歩けよ乙女

森見登美彦

作家の口福　おかわり

朝井リョウ

ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー

ブレイディみかこ

あの夏が飽和する。

カンザキイオリ